槐（かい）

岡井省二創刊

平成23年8月号

平成二十三年八月一日発行　第二十一巻第八号　通巻第二四二号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

真菰刈る

高橋将夫

夢を見るために蚕は繭に入る

睡蓮の水面見てゐて雨を知る

黒南風も白南風も波立ててゆく

「俳句研究」夏の号八句

風下を見ることはなし鯉幟

PDF= 俳誌の salon

宇宙への旅の約束子供の日

サングラスかけて声まで変はりたる

紅ひくも蟻をひねるも指の先

天牛の髭が心をくすぐりぬ

目の前が開けて真菰刈り終はる

遠泳を終へそれぞれの余力かな

ゴールには汗と涙のありにけり

PDF= 俳誌の salon

槐賞受賞作品二十句

風を切る愉楽

柳川　晋

大日へ一本道の桜かな
客観の主観にとけて桃の酒
春霰や摩羅出してゐる石の獅子
竜天に春画抱へて登りける
風を切る愉楽を知りし燕の子
鯊一列頭(かしら)を上げて焼かれけり
水と火と風を操る女鵜匠
恐竜は滅び筍流しかな
千億の朝新しき秋ひとつ
青北風の渦や宇宙の始点より
いなつるび交(つ)尾(る)び膨張する宇宙
触媒は月光クロスカップリング
狼に顎(あぎと)佳人に斑気あり
ビッグバンより取り置ける鬼火かな
種子(しゅじ)ほこつと湯気となりたる大根焚
乾坤を入れし懐手なりけり
腹ぺこの獏に引かれて新年へ
重箱の隙を言霊にて充たす
北河内七市百村初戎
滑つても転んでも初戎かな

PDF= 俳誌の salon

槐安集

水野恒彦

劫初より闇深かかりし蟬の穴
病葉や眞昼の夢にまぎれきて
晴れし日の大向日葵に海昏く
花桐のうつつ虚しき重信忌
くりかへす輪廻の果の虎鶫

延広禎一

鯛田麩振りかけをれば花の雲
黄みどりの欝金桜と阿修羅かな
磐座に風蘭龍神祝詞あぐ
小判草をざつくり纏ふ羅漢殿
はんざきや志功の眼鏡分厚くて
志功＝棟方

加藤みき

大木の合歓の花なりグランヴィル
青葉木菟の真昼の貌に海の風
水無月の雨土塊のひかりかな
眠る子を抱かせてもらふ端午かな
青梅雨や折敷の匂ひ飯にあり

石脇みはる

晴れ晴れと鮎解禁の千種川
蓮散華守る大葉のゆらぎなし
初夏や岬の端（はな）の碇泊灯
踊子草湧水口にふふみけり
射干や午後の講演はじまりて

PDF= 俳誌の salon

中島陽華

ピノキオの動き出したり蜘蛛の糸
夏安居の油断してをるムール貝
羽根開く剥製孔雀梅雨寒し
梅檀の花や江口の渡し跡
青嵐別府の土曜夫人かな

竹内悦子

土の道歩くよろこび花大根
人も花もこの世に得たる命かな
シャム猫の寝そべつてゐる黄砂かな
鏡中の薔薇の香りを覗きゐる
金雀枝や六人乗りの乳母車

栗栖恵通子

能登五句

竹人形の竹の御髪よ春しぐれ
満天星やぞろり鏡花の長羽織
越前の闇濃きいさぎ踊りかな
道元の蕎麦つゆ黒し永平寺
花ちらし一揆太鼓の八鬼面

大島翠木

ミモザ漂ふ或る日鏡の深かりし
紫荊思考回路は月の香へ
ある筈もなき胸中の水中花
大山蓮華傾城の眼で寄つて来る
悼献体
殯せん桜餅の葉はづしけり

PDF= 俳誌の salon

雨村敏子

月山や八十八夜の水音する
夏の夜のぬつと出でたる大首絵
マーラーの大地の歌や夏の潮
夏潮や人の起源を遡る
病雁の句碑の五月雨ゐたりけり

小形さとる

海がまあきれいに晴れて一夜鮨
狐草むずかしさうに笑ひをる
翁草このごろといふ明るさに
蟇交ると云へばなぜか法善寺
満願や身を吹きぬけて青嵐

本多俊子

ちちははに逢はむ螢を追うてゆく
揚羽より閑かに針の動きをり
蟻走る方を高野と思ふかな
遠青嶺見上げることは歌に似て
生生世世(しょうじょうせせ)青田の風に吹かれをり

久津見風牛

葉桜になりて米寿に近づきぬ
五月雨の涙線上をあふれけり
春夕べむつつり耳を遠くゐる
麦熟れて吾がなきあともこの日ざし
麦刈りの良か穂を抜いて噛んでをり

PDF= 俳誌の salon

近藤きくえ

老鶯の啼きてなごみし満座かな
芹摘みし記憶ははるか芹青む
緑蔭をぬけしせせらぎ大河へと
青芭蕉の風とたはむるしらべ聴く
水口に砂袋あり行々子

近藤喜子

来来世世われ薫風となつてをり
傾国の白さとなりぬ夕牡丹
玄室にゐるやうな葉桜の下
麦秋や天上すこし寂しきよ
花藻抱く魚の眠りの深きかな

谷村幸子

ひとりしずか貫うて飾る虚子忌かな
躑躅もゆ善峯寺の文殊さま
飴なめて麒麟みてをる木の芽晴
苔の花いとおしみつつ庭手入れ
黄心樹の花咲く道のなつかしき

瀬川公馨

夜蛙に弓矢を番へゐたりけり
春の光(かげ)と遊びてゐたる羅漢かな
葦牙のフェアリグリンの水辺なり
笹百合の後生楽とよ大神明神
達者かとひとに問ひけり花茨

PDF= 俳誌の salon

久津見風牛

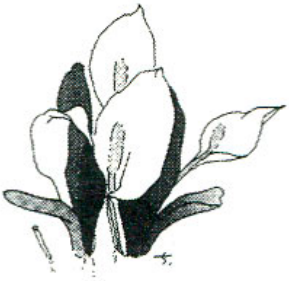
岬離れ帰雁の高さ定まりぬ
御陵を要にみどり限りなし
蛸壺の首つながれし春の海
初蝶のおぼつかなさを目で追ひぬ
炊飯やつばめ反転身ほとりに

中野京子

どの声も弥陀のお耳に藤の花
法念と空也見てゐるおなじ虹
なにもかも透けてゆくなり新樹光
通草咲く山家住ひの上り下り
鯉幟風ぬけてゆく太つ腹

西村純太

きら波や近江遠江夏に入る
あかつきに何のこゑ聴く夏行かな
卯波よりたちあがりたる智拳印
あじさゐの梵字の闇に濡れをりて
エポケーにゐたるすぢみち雲の峰



PDF= 俳誌の salon

槐市集

本間瓦子

夏の海眉太き女(ひと)手をかざす
またかろき腓返りの梅酒かな
智山派と豊山派をゆくサングラス
花筏枕詞の如くなり
パイプオルガニストの黒きハンカチよ

前田美恵子

草笛や二の丸跡の姿よし
藤村と語らうてをる緑雨かな
馬追の村原発(原子力発電所)の夏嵐
馬場砂を駆ける女の跣かな
善意の輪広がつてゆくリラの花

松下八重美

夏鶯来鳴きて一ト日始まれり
風薫る後期高齢者のゴルフ(ゴルフ=パークゴルフ)
抱く嬰の額に大の字楠若葉
燕来る無住の家の増えにけり
葉桜や忘れおもちやの砂まみれ

柳川晋

天網に掛からぬ魚(いを)の胡沙となり
尾骶骨クイと起こして夏に入る
缶を蹴る向かうに茅花流しかな
御来迎見知らぬ影を連れてをり
追ひ抜きて追ひ付かれたる青葉影

PDF= 俳誌の salon

槐集

鯉はねし後のしじまを暮春とす　枚方　熊川　暁子

声明が業剥いでゆく苔の花

竹薮の膨らむほどに囀りて

葭切のこゑに斜めの手こぎ舟

水張つて日本平らになる五月

空海の夢の象(かたち)を雲海に　守口　柳川　晋

六根を全部ケルンに積んで来し

短夜の明くる加減を奈落にて

蒙(くら)き夜を啓く神事や鉾流

対岸は宇宙なりけり青岬

竹皮を脱ぎ少年の戻らざる　安城　近藤　公子

蟬の羽化メロディー流れ出だしたり

万緑に体内音叉ひびきあひ

滝つぼに水の女神の集ひたる

ひまはりを抱きて主役の顔となり

高橋将夫選

甘いもん大好きといふ眼白の目　守口　岩下　芳子

すみのえの遠き波音晶子の忌

衣更へて身の丈に添ふたつきかな

竹植ゑて屋上庭園塔近し

本堂の梅雨の扉を開けにけり

時薬(ときぐすり)とふことばある落花かな　枚方　近藤　紀子

花の山に後見い見い入りしまま

夏野菜の苗の勢ひ畝に置く

わだかまりを卯波に乗せて遠ざくる

遺されしペンなじみたり啄木忌

仏頭や八重花びらの嵩たかし　摂津　中田　禎子

一物も無き水面なり鳥雲に

雨だれの音の乱れや松の花

柿若葉丁石ひとつ越えにけり

滝しぶき全身に浴び無垢となる

PDF= 俳誌の salon

銀河往来

高橋将夫

◎「槐集」観照

鯉はねし後のしじまを暮春とす　熊川　暁子

鯉がはねた後の静寂は、なるほど春の暮が最もぴったりくるかもしれない。研ぎ澄まされた感性の一句。

〈声明が業剥いでゆく苔の花〉の句からは、苔の花の咲く境内に流れる声明を聞きながら心が洗われてゆく心境がよく伝わってくる。

〈竹薮の膨らむほどに囀りて〉では、竹薮で囀る鳥の賑やかさがリアルに蘇る。

〈水張つて日本平らになる五月〉の句は、「日本が平らになる」としうデフォルメされた表現が実にユニーク。

空海の夢の象を雲海に　柳川　晋

空海の夢の象を雲海に見たという。弘法大師空海にも我々凡人のように夢があったと言われてなんだかほっとする。もちろん、雲海のように雄大な夢だったのだろう。

〈六根を全部ケルンに積んで来し〉の句によれば、六根清浄、六根清浄と唱えながら頂上まで来て、自らの六根をケルン積んでしまったという。石の代わりに六根を積むという発想力実にユニーク。でも、六根を置き去りにすると帰りの道が心配でもあるが…。

〈蒙き夜を啓く神事や鉾流〉の句のように、この神事で暗い今の世に光明が差し込むことを期待したい。

〈短夜の明くる加減を奈落にて〉の句で、作者は奈落の底から夜明けを見ているという。何かよほど思案投げ首のことがあったのだろうが、解決は時間の問題のようで、何よりだった。

竹皮を脱ぎ少年の戻らざる　近藤　公子

少年が戻ってこないという。竹も一旦皮を脱ぐと、もう元の少年の頃にはもどれない。それにしても、はたして少年は一体どこへ行ったのであろうか。

〈滝つぼに水の女神の集ひたる〉の句では、女神がよりによつて滝壺に集まるという発想がユニーク。

〈ひまわりを抱きて主役の顔となり〉の句では、得意げな顔が目に浮んできて思わず口元がほころぶ。

甘いもん大好きといふ眼白の目　岩下　芳子

眼白のあの特徴の有る目は甘いもんが大好きな目だという。ほほえましい一句。

〈衣更へて身の丈に添ふたつきかな〉の句、何といっても身の丈にあった暮らしが一番。〈本堂の梅雨の扉を開けにけり〉の句、梅雨の扉となると、なんとも重そう。開けたら闇がありそうな気もするが。

時薬とふことばある落花かな　近藤　紀子

日にち薬という。落花の傷心も時が癒してくれる。

〈わだかまりを卯波に乗せて遠ざくる〉の句も掲句に近い思いを感じる。〈夏野菜の苗の勢ひ畝に置く〉は晴れ晴れとして、元気がでてくる。

一物も無き水面なり鳥雲に　中田　禎子

PDF= 俳誌の salon

波もない静かな水面と鳥が帰る大空が眼前に広がる。おおらかな一句。〈滝しぶき全身に浴び無垢となる〉もまた清々しい句で、掲句に通じる精神世界がある。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon